『エデンの太陽』
著：朝丘 戻
ill：カズアキ

　他人を癒やせる人間ってすげえなと思う。
　かーちゃんをはじめ、俺のまわりにはたくさんの人を癒やすために頑張ってる人間がいる。ガキのころからだ。
　他人を傷つける奴ってのは、だいたい自分の幸せしか考えてねえ。些細な喧嘩とかもそう。差別も、自分の主張ばっかりして相手の心を知ろうとしない態度じゃ解決しねーんだ。
　俺も癒やしの人間になりたいって、ずっと夢見てた。人を傷つけたあとは、余計に。

「――……なんか、お客さんめっちゃ緊張してね？　大丈夫？」
　目の前で、もっさりした前髪に顔を半分隠し、今夜俺を指名してくれた男がうなだれている。
「すっげえ素敵なホテル選んでくれてありがとな。恋人のセックスがしたいんだよね？　じゃ、とりあえず下の名前で呼びあう？　俺はユウね。呼び捨てでもなんでも好きに呼んで」
　明るく話しかけながら、ベッドに座っている彼の左隣に自分も腰かけた。寄り添った瞬間、びくっと数センチ退けられて、そりゃないんじゃん、と思う。……ていうか、俺をこの豪華な高級ホテルの部屋に招き入れてくれた数分前から、この人はずっとこんな感じだ。
「なーんだよ、どうしたの？　初めてで怯えてんの？　そんならそれで、ちゃんと教えるからまずは一緒に風呂入ろーぜ。それとも本当はデリホスなんて利用したくなかった？　罰ゲームでもさせられてんの？　なんでも言ってよ。言ってくれたらきちんと考えるから。じゃねーと無駄に時間だけ過ぎていくしさ、俺も申しわけねーよ」
　顔を覗きこんでみると、黒い前髪の隙間から、痛いんじゃねって心配になるぐらいぎゅっととじている目と、ぎっちりひき結ばれた唇が見える。両手は突っ張って、膝の上で拳をきつく握りしめている。関節が真っ白に変色するぐらい。……大丈夫か、ほんとに。
「ぼっ……」
　お、なんか言いだした。
「ぼ……――ぼく……ぼくは……自分の、意思で、……電話、しました。きみを指名、した」
　めっちゃ震えたひきつった声で、断言してくれた。
「へへ、よかった。そりゃ嬉しいよ。あんがとね」
　彼がロボットみたいに首をがく、がく、と動かして、やっと俺のほうへ顔の角度を変える。でも相変わらず前髪のカーテン越しにうかがうような逃げ腰スタイルだ。
「た……大変な仕事、だね。嬉しい、なんて……言わなきゃ、いけなくて」
「ん？　どゆこと？」

「う……嬉しいわけ、ないでしょ。……ぼくみたいのに……呼びだされて」
「？　どゆこと？」
　まじでわからない。自虐？
「べつにいまのところ嫌だなんてちっとも思ってないよ。まあ、お客さんの望みを叶えるためにきたわけだから、願いは言ってほしいけどさ」
「ね、ねが……願い……」
「うん」
　ゲイ専門デリバリーホストの仕事を始めて一ヶ月ほど。“童貞だから”とか“処女だから”ってこの人みたいに緊張してテンパるお客さんは何人かいた。二十代の若い人も、既婚で年配の人も。そのたび雑談から始めて、心をほぐしてあげて、抱いたり抱かれたりしてきたんだ。
　うちはレンタル彼氏みたいに癒やしの時間をあげるのが目的の店だから、ただ食事をしたり映画を観たりして終わる日もあるけど、この人の指名理由はそうじゃない。
「変わった性癖があってもべつに驚かねーよ。相談にのっから、とりあえず願い言ってみて」
　前山穏陽、二十三歳、うちの店は初めて――店長から聞いてきた彼のお客情報はその程度。恋人同士のあったかいセックスを、俺と一時間半楽しみたいってことでご対面した。
　外見はかなり痩せ型ではあるものの、たぶん適度に肥えればめっちゃ格好いい男だ。髪色が真っ黒で、長いこと放置していたのかぼさぼさもっさり頬まで覆っており、顔はあまり見えないのに、覗くと鈍く光っている瞳は大きく切れ長で、鼻筋も通っている。唇も、色は悪いけどふっくら厚めで美味そう。そしてなにより手がやばい。指の一本一本が鬱陶しくねってぐらい長くて、甲も筋張っていて彫刻みたいに繊細。隣に座っているのに脚の長さも自分とだいぶ差があって、そういえば部屋の前で迎えてくれたとき身長も優に百八十超えてる印象だったなと思う。たぶんデリホスの先輩で外見に厳しい喜田さんに言わせるとラッキーデーってやつ。
　お客さんに限らず、俺は容姿なんて正直どうでもいい。そこから見えてくる人格や生活のほうが重要だ。髪がもさっとしていれば美容院が嫌いなのかとか、疲れてんのかとか心配になるし、太っていれば食べるの好きな奴なのかなとか、ちょっと自分に甘い怠惰な奴なのかもとか察する。それだけのこと。この人はおそらく……疲れてる？
「あのね、一応うちの店って、セックス目的で会ったら最初は一緒に風呂へ入って、お客さんの身体を洗ってあげるって決まりがあンの。穏陽、どうする？」
　彼の背中に右手を添えようとしたとたん、ばっ、と退いて身がまえられた。分かれた前髪のあいだから大きく見ひらかれた左目だけがあらわになっていて、頬も真っ赤に染まっている。
「な、な……なっ、まえ、」
　ぶはっと吹いちまった。こんだけ意識してもらえると気分もいい。
「下の名前で呼ぶの嫌だった……？」
　違うって予感しながら小悪魔っぽく訊いてやる。彼は口をあぐあぐ噛みあわせて必死に声をだそうとしている。
「はっ……初めてで……ぶ、不気味だ」
「不気味ってどーいうことだよっ」

「ご、ごめん。す、素直な……気持ちだった。……驚いた」
　花が萎むようにまたうつむいてちぢこまってしまった。
　なんだろう。コミュ障なのは一目瞭然なんだけども、なにに怯えているのか判然としない。
「……なあ。“初めて名前呼ばれた”ってのも気になンだけど、そこらへん訊いていい？」
　また口を結んで、黙りが始まってしまう。さすがに立ち入った話はしづらいか。部屋に入ってすぐ設定したタイマーは、二十分が過ぎようとしている。
「よし、じゃあわかった。ゲームしよーぜ！」
　ベッドサイドにある棚の上からメモ帳とペンをとった。
「げ、ゲーム……？」
　真んなかに二本の縦線をひいて、それぞれの下に“する”“しない”と文字を書く。そして彼にペンを渡す。
「ほら、横線描いて。あみだくじだよ」
「あ、あみだ……くじ」
「これでセックスするかしないか、運命決めよう」
　なにかを決断するとき、強引な背中押しやきっかけが必要なこともある。彼がもしそれを欲しているなら、この提案にノってくれるはずだ。拒否られたらまたべつの方法を考える。金をもらっているぶんの仕事はきっちりさせてほしい。
「う、運命……」
　ため息みたいな抜けた声で俺の言葉を復唱し、彼がペンを持ったまま俺の顔とメモ紙を交互に見やる。ごく、と唾を呑んで、下唇を噛む。悩む。でもじっと見返して待っていたら、彼は不器用な震えた手つきで横線をいくつか描いてくれた。よっしゃ。
「うん、オッケー。じゃ俺も書き足すから」とペンを受けとって、自分もざっざっと雑に数本加え、素ばやく左の掌で隠した。これでずるっこなしだ。
「はい。右と左、どっちにするか決めて。決めたら戻れないよ。絶対にあみだに従うこと」
　最後のチャンス。ここで自ら願いを言わないなら、運命を神さまに決められちまうぞ。
　やっぱりあみだなんかしなくていい、セックスする、と本人に自分の殻を破ってほしいってのが本音だけど……それは無理っぽいかな？
「……。……わかった。あみだに、従うよ。……。……右に、する」
　どうやら神さまに甘えたいらしい。怖がりめ。ならばしょうがない。
「わかった、右ね。あみだくじ～、あみだくじ～」
　子どものころかーちゃんが俺と遊ぶと決まってうたってくれたあみだくじの歌を口ずさんで線をなぞった。左の掌をずらしてどんどん下へむかう。運命のじぐざぐ道。こたえは――。
「――……シない、だ」
　自分の声が不服そうに響いた。彼がほっと胸を撫でおろしているから、余計癪に障る。
「ちょっと、喜ばないでよ。俺はセックスするためにここきたんだぜ？　仕事の責任だって、プライドだってある。ひでーよ、シないで喜ばれるなんてこんなの俺の罰ゲームじゃん」
「ぷ、プライド……罰……そ、そうか……ごめん……」

「謝られるともっと惨めだから」
「は、はい……すみません」
「セックスしないんなら、ちゃんと会話しようよ。なんであれ、俺は金もらってお客さんを癒やしにきてるんだよ。それとも黙ってむかいあってるだけで癒やされるっての？」
　ついキレ気味に責め立ててしまった。接客として間違っているとしても自制しきれない。
「家族や友だちにカミングアウトできないけどセックスは経験したかったとか、恋人ができたのに童貞だから練習させてほしかったとか、男に掘られる興味湧いたとか、嫌いな奴に俺が似てるから殴ってやりたかったとか、どんな理由でも怒んねーから言ってみてよ。セックスして癒やすつもりできたのに、シたくねーって喜ばれた俺には訊く権利あると思うよ」
　仕事ってのは努力のぶんだけ金がもらえる。かーちゃんや、世話になったじーちゃんとばーちゃんを見ていて俺が学んだことだ。彼に満足してもらわなければ帰れない。
「あ、う……ぅ」
　激しく動揺しているが、言葉を探してくれているのはわかる。うん、とうなずいて待つ。
「ど……童て、い……で。セックス……を、け、経験……して、みたかったんです。でも……ゆう君が綺麗で、綺麗すぎて……優しくて、他人に、こんなふうに、は、話しかけてもらえるのも……初めてで。いま、自分は、ここに生きてるんだと……思って、困惑して、ます」
　話してくれた。いまどき小学生でもこんなピュアじゃないんじゃねって驚く告白。
「ありがとう。俺、逆に馴れ馴れしくてうぜーって言われんぜ？　さっきもいきなり下の名前で呼び捨てたりしたじゃん。でもあれも嫌だったわけじゃねーの？」
「な……ない……。嫌じゃ……ないです。絶句しただけ」
「絶句って」
「客、だと……ぼくも、人間扱いして、もらえるんだなと……」
　うーん……なんか外でやたらひどい奴らに囲まれてるっぽい？　しかも救ってくれる友だちもいないってことだよな。下の名前で呼ばれたことのない二十三歳の、ひとりぼっちの臆病者。
「客じゃなくて“恋人”だろ？　この一時間半は、俺たち恋人だぜ」
　荒療治、ってな勢いで自分の右手で穏陽の左手を掴んだ。穏陽が狼狽えて硬直している隙に、長い指をひらいてでかい掌を握って、にかっと笑いかけてやる。
「穏陽にはいきなりセックスだとハードル高すぎっぽいから、ちょっとずつすすめてみよっか。童貞でも気にすることねーよ。ゲイだとさ、若いときするチャンスがなかった、って悩んでる人なんかいっぱいいる。穏陽は俺らのこと好きに利用していーの。俺らもそれを嗤ったりしねープロなんだから。な？」
　落ちつかせてあげたくて優しく話しかけているのに、穏陽本人は掌をひらき気味にして動揺し続けていて、会話に集中していないっぽい。繋がった手と、俺の顔とを、目玉だけ動かして観察しながら当惑している。
「あ……ぁ……ありが、とう。……あの、でもすみません、手汗が……」
「いーっつってんの。セックスしたら汗まみれで唾液まみれで精液まみれなんだぞ！」
　びくっとした穏陽の頭上にびっくりマークが“!!”ってふたつ見えて爆笑しちまった。

「あははははっ」と左手で腹を抱えて大笑いする。そんなあたりまえのことすら覚悟しねーでデリホス頼んだンかよ。
「今日はしかたないけど、もしまたデリホスに興味湧いて俺のこと指名してくれる気になったらいつでも呼んで。穏陽のペースにあわせてじっくりゆっくりセックスのよさ教えるからさ」
　へへ、と穏陽を見返していると、穏陽の掌が自分の掌に隙間なくなじんでいく感触を覚えた。決して強くはないやわらかな力で、指と指が絡みあっていく。湿った、熱くて大きい男の掌。
「……ありがとう。……きみに会えて本当によかった。ゆう君」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」
http://www.fwinc.jp/daria/